

新潟県立近代美術館便り

# 雪 椿 通 信



開館10周年



第20号

2003.4

# 三代藍堂・宮田宏平展 ～蠟型鑄金・終りのない物語～

1993年に開館したわが新潟県立近代美術館は7月で開館10周年を迎えることになりました。これを記念する第一弾の展覧会として佐渡在住で現代金属造形の代表的作家である三代藍堂・宮田宏平の回顧展を開催します。

1926年佐渡佐和田町に生まれた宮田は祖父初代宮田藍堂にはじまる家伝の蠟型鑄金技術を基礎に、卓抜な構想力と造形力を発揮して、今なお現代感覚にあふれた立体造形を生みだしている作家です。ところで宮田が造形の基礎とする「蠟型鑄金」とは鑄型の原型を蜜蜂の巣からとった蜜蝋と松脂を混ぜた蠟でつくる技法でエジプトに起源をもち、中国古代の殷、周の銅器もこの技法でつくられました。わが国へは中国・朝鮮から伝播して、古くは飛鳥、白鳳の金銅仏がこの技法でつくられました。有名な法隆寺の釈迦三尊像もこの技法によります。本県には幕末に柏崎と佐渡に伝えられ幾多の名工が輩出しました。柔らかな味わいと細密な表現に特色があり、1978年新潟県無形文化財工芸技術に指定されています。

さて、1943年、家業を継ぐべく鑄金家を志した宮田は東京美術学校工芸科鑄金部に入学し自由な校風に触れる

とともに内藤春治の薫陶を受け、在学中に日展入選、特選を受賞、戦後工芸界の新生代として頭角を現しました。その後は日展、日本現代工芸美術展を中心に工芸革新の旗手として活躍します。例えば蠟と鉄、金網をコンパインさせたり(図1)、鑄造素材にステンレス、造形素材に発泡スチロールを採用したのも宮田が最初でした。白銅への岩絵具の彩色も新しい試みです。(図2) こうして鑄造素材、造形素材、鑄造技術の改良に努め、花瓶、置物という従来の工芸概念を覆した彫刻的なオブジェという未知の造形領域を確立しました。「工芸」の領域を超え、現代美術の文脈に沿った独創的な造形活動には瞠目すべきものがあります。

さらに宮田は日本独自のジュエリー制作を志し、蠟型鑄金の特質を駆使した精緻で流麗な意匠に富む装身具も手掛けて、この分野でもわが国を代表する作家として高い評価を得ています。水の流れからイメージされた作品(図3)の前ではきっと、魅せられた女性たちの漏らすため息が聞こえるでしょう。

展覧会では装身具を含む代表作により宮田の五十有余

## プリウレ美術館所蔵 モーリス・ドニ展

1880年代終わりから20世紀前半にかけて活躍したフランスの画家・版画家モーリス・ドニ(1870-1943)。彼はセリュジェ、ボナールら同年代の若い画家たちとナビ派を結成しました(「ナビ」とはヘブライ語で「預言者」を意味する言葉。ナビ派の作品については2000年の当館の展覧会図録「ナビ派と日本」をご参照ください)。ドニはそのナビ派の中でも最年少でありながらグループを先導し、理論家としても優れていました。20歳にして表した論文で、「一定の秩序の下に配された色彩によって覆われた平らな面」と絵画を定義したことは殊に有名です。その言葉は、古い絵画観との決別宣言であると同時に、ドニ自身の意図は別にして、のちの抽象絵画の発展についての、まさに「預言」ともなっていたのです。

ドニは若いときから熱心なカトリックであり、宗教性、神秘主義、象徴主義への傾向を示しており、ナビ派の仲間たちのあいだでは、その簡潔な画面から「美しきイコンのナビ」と呼ばれていました。また、ナビ派時代には伝統的な遠近法や陰影表現とは無縁の平面的で装飾性の豊かな作品を多く描きましたが、縦長の画面構成や縦書きの署名などには当時流行していた日本美術からの影響

もうかがえます。

20世紀にはいるとナビ派は自然消滅し、それぞれが各自の道を歩むようになります。ドニは近代の作家としては異例とも見えるほど宗教画や装飾壁画に力を入れて制作する割合が多くなります。1908年には共に歩んだ亡き年長の友人ポール＝エリー・ランソンの名を冠したアカデミー・ランソンを立ち上げて、後進の指導も行いました。そこには日本から留学した画家たちも所属し、その記録には梅原龍三郎や、本県出身の矢部友衛といった名も見えます。

確実に成功をおさめ、画壇での位置も確実にしていったドニは、パリの西約20キロメートルにあるサン＝ジェルマン＝アン＝レイの「プリウレ」(小修道院の意)と呼ばれた瀟洒な古い建物を、長い間熱望した末1914年に終に購入しました。それ以降終生そこに暮らし、制作を続けました。現在そこはプリウレ美術館(正式にはイヴリーヌ県立モーリス・ドニ＝プリウレ美術館)として、画家の生涯にわたる作品や同時代の仲間たちの作品を収蔵し公開しています。この度プリウレ美術館の全面的な協力のもと、日本では実に22年ぶりとなる今回の展覧会が

年に渡る制作活動を紹介し、一人の革新的工芸作家が「蠟」と「火」と「土」と「金属」で綴った創作誌「終りのない物語」の軌跡を振り返ります。機知とユーモアと諧謔精神にあふれて、人の心と生活の匂いを現代の感覚で造形したラディカルで瑞々しい金属立体造形の世界を御鑑賞下さい。

展覧会を御覧いただければ、きっと「作家」とは、そして「造形」とは自然に学びながらもひたすらに未知の「形」や「姿」を創り出す人であり、営みのことなのだ、自然に納得していただけるのではないかと思います。

(学芸課長 小見秀男)

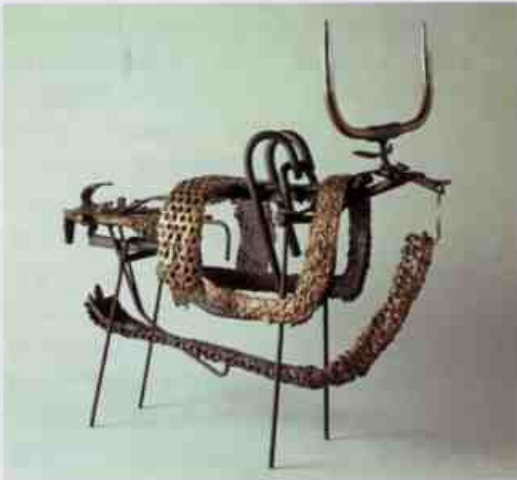


図1《静かなる闘志》1964年 京都国立近代美術館蔵



図2《生命の透視風》1982年  
千葉県立美術館蔵



図3《回転 美豆波乃女》1977年 個人蔵

実現することになりました。同館の所蔵するナビ派時代の珠玉の作品を含む約80点に加え、当館所蔵の油彩画《夕映えのマルト》《ベンガル虎、バッカス祭》、版画集《アムール》も合わせて展示いたします。モーリス・ドニの「純情、端麗、清鮮」で優しさにあふれる芸術をどうぞお楽しみに。



《猫といるランゾン夫人》1892年頃



《キリストの墓を訪れる聖女たち》1894年

## 近代美術館10年の歩み トチの木も育った

美術館の建つ千秋ヶ原を初めて訪れたのは1991年の秋だったと記憶している。この年、7月に新美術館が着工となり、建物を支える基礎杭がドスン、ドスンと盛んに打たれていた。当時、新潟市の美術博物館に勤務していた同僚たちと一緒にだったが、その時撮った写真を見ると全員が、頭にヘルメット、長靴姿である。

千秋ヶ原一帯は廃土で埋め立てられた荒地で草も木も生えておらず、石ころばかりが目立った。すっかり、文化ゾーンとして整備された現在の千秋ヶ原ふるさとの森からは想像もつかないが、当時、周囲の建物はハイブ長岡のみ、見渡す限りの荒涼とした風景に思わず「本当にここに美術館が建つのか」と皆で顔を見合わせた様な気がする。それから一年半後、立派に美術館は完成して、1993年の7月15日に開館の運びとなった。数年にわたり準備をしてきた館長以下の職員が喜びを新たに、「新生児」の誕生を祝った。みんな希望に燃えて意気軒昂だった。開館記念「大光コレクション展」も盛況だった。

ただ、美術館周辺に植えられた木々たちだけは、植えられてからもう一年以上経っていたのに元気がなかった。特に美術館前面に植えられたトチの木は枯れてしまったのかと思わせるほど弱っていた。本来なら青々と葉を繁らせて、夏の木陰をつくるはずなのに芽も出なかった。滋味に欠けた「土地」が良くなかったのである。

翻って考えれば、美術館の立地条件も決して恵まれていたとは言えない。長岡市の川西地区。長岡市民には僻地と言って憚らない人もいた。雪は中心街より多く降る。今のように循環バスも走っていなかった。「交通アクセスが悪い」と沢山の人の目にさらされた。



美術館前面のトチの木 今年も葉を繁らせてくれることだろう。

その後の美術館とトチの木はどうなっただろうか。美術館から言えば、「シカゴ美術館展」(1994年)「佐藤哲三展」(1995年)、「子供のための美術展」(1995年)、「エルミタージュ美術館展」(1996年)「国立西洋美術館展」「アムステルダム市立美術館展」(1997年)などを開催した最初の5年間は必死で県民の間に「根」を張るべく努力した。トチの木も根を深く張って漸く葉を盛んに繁らすようになった。悪条件はあったが両者ともが一緒に育って何とか一人前になれたと思ったのはその頃である。

その後も、県民からの温かな滋養分を得て、曲がりなりにも美術館は開館10周年を迎えることができた。もちろんトチの木も健在である。ただ、当館に限らず美術館を取り巻く状況は10年前とは違って大変厳しい。美術館の存在そのものを否定する人はさすがにいなかった。しかし、社会における役割が問われ、使命(ミッション)の明確化が迫られている。筆者が美術館の大切な役割だと考えている鑑賞や体験を通じての県民共有の「芸術の生活化」、「生活の芸術化」を目指して、美術館の新たな10年に出発したい。

(学芸課長 小見秀男)

## 新潟県立万代島美術館、いよいよ開館！

### プレオープン所蔵品展

#### 「いろ・かたち・さまざまな表現」

新潟県立万代島美術館が、いよいよ7月12日に開館します。この開館に先立ち、5月1日から5日まで、複合施設「朱鷺メッセ」の開業記念イベントにあわせてプレオープン展を開催します。2000年度から2002年度にかけて新しく収集した約80点の作品を美術館とともに一般公開します。この期間、観覧料は無料となりますので、ぜひ新しい美術館に足をお運び下さい。

〔展覧会期〕平成15年5月1日(木)～5月5日(祝)

〔開館時間〕午前10時より午後6時まで

### 開館記念展 I 「絵画の現在」

7月12日(土)から開催される開館記念展は、現代の絵画をめぐる様々な問題に純粋に取り組み、意欲的な制作活動を行っている55歳以下の国内の作家11人を選び、最近作をそれぞれの個展という構成で紹介するものです。出品作家は、岡村桂三郎、斉藤典彦、菅原健彦、辰野登恵子、千住博、手塚雄二、中村一美、奈良美智、日高理恵子、福田美蘭、森村泰昌の11人です。

〔展覧会期〕平成2003年7月12日(土)～8月17日(日)

〔開館時間〕午前10時より午後6時まで  
(観覧券販売は午後5時30分まで)

〔観覧料〕一般800円/大高生500円/中小生300円  
(中小生は土日祝は無料)

#### 【新潟県立万代島美術館】

〒950-0078 新潟市万代島5-1 万代島ビル5階  
TEL.025-290-6655(代) FAX.025-249-7577  
<http://www.lalanel.gr.jp/banbu/>



# 平成14年度 新収蔵品

## 〈世界の美術〉

### 版画

- ◆アンディ・ウォーホル  
《花》(10点組) 1970年



- ◆キース・ヘリング  
《花》(I-V、5点組) 1990年



## 〈日本の美術〉

### 日本画

- ◆小山正太郎《障子貼り図》1908年  
《一樹花十字詩図》1908年
- ◆上田麦穂《山茶花》1933年



- ◆大矢 紀《風渡る》1999年
- ◆竹内浩一《降》2000年  
《ぶどうに雨》2001年
- ◆沼崎隆昌《瀬》1999年
- ◆島中光享《スジャータ奉納》1988年  
《歎草IV》(2点組) 1996年
- ◆八田 哲《夏のカシュガル》1988年  
《夜のカテドラル》1989年  
《タスコ白日》1991年

- ◆村田茂樹《同里の町よりII》1984年  
《北京・東山より》1985年  
《雲南丘の村》1986年  
《道二題》(2点組) 1991年

- ◆渡辺信喜《牡丹図》1989年  
《秋晴るる》1992年

- ◆堀 泰明《雲南讃歌》1988年

- ◆牧野虎雄《麦扱く農婦等》1918年  
《秋近き濱》1934年

- ◆田中稔之《円の光景 82-14》1982年

- ◆小林正人《測く力》1994年

- ◆野見山暁治《いけにえ》1995年

- ◆木下 晋《101年の揺動》2001年

- ◆宮崎 進《黄色い大地》2000年

- ◆竹田康宏《Under the leaves》1994年

- 《Under the leaves 98 AU "Let's stay right here"》1998年

- ◆藤原有司男《コココーラ・プラン》2002年

### 彫刻

- ◆飯内佐斗司《走る童子》(4体1組、2対1組) 1996年

- ◆宮崎 進《ナナエツの少女》1996年

### 工芸

- ◆八木一夫《環境の表裏》1967年

- ◆岩田藤七《花器》1960年

- 《花器》1976年

- 《皿》1976年

- ◆岩田久利《花器》1978年

- 《花器》1985年

- 《花器》1985年

- 《盛器》1986年

- 《花器》1989年

- 《花器》1991年

### デザイン

- ◆佐藤可士和 CD「Smag」

- 発売告知ポスター (2種) 2000-01年

- CD「Smag」

- 新聞紙面広告 (2種) 2000-01年

- ◆原 研哉《紙とデザイン》2000年

## 〈新潟の美術〉

### 日本画

- ◆竹内蘆風《武陵桃源之園》1928年

- ◆金井二郎《海の詩》2002年

### 洋画

- ◆水島 清《海郷》1953年

- ◆木田真吾《実相#116》1997年

- ◆岩下尊弘《地吹雪》(3点組) 1997年

- 《東の間の静寂》1997年

- 《浄水場》2001年

- ◆川崎ヒロ子《MORE-01-02》1999年

- 《MORE-99-N-日》1999年

### 平面

- ◆市橋太郎《North and Gravity No.16》1974年

- 《M792》1979年

### 素描

- ◆末松正樹《素描》(21点) 1944-46年

### 工芸

- ◆堀政晴《鎗分花器「彩」》1997年

- ◆広川晋五《01「スペース・XIII」》2001年

- ◆高井 進《青磁吹染鉢》2001年

- 《青瓷観文壺》2002年

### 写真

- ◆市橋太郎

- 《セルフポートレート》1973年10月22日

- 午後3時08分) 1973年

- (1973年10月22日3時15分) 1973年

## 下半期 展覧会案内

新潟県立近代美術館開館10周年記念

## 大倉集古館名品展

2003年10月18日(土)→11月30日(日)

前期: 10月18日(土)→11月9日(日)

後期: 11月11日(水)→11月30日(日)

## コレクション-10年のあゆみ展

2004年1月8日(水)→3月21日(日)

## ●表紙作品解説

竹田康宏《Under the leaves 97D Nagaoka "Do you love me?"》1997年

“Do you love me?”とは、いったい誰からの問いかけなのでしょう。それは、2枚の剣のような葉が、たがいに寄り添い支え合うことで自立するという作品の構造に求められます。その姿は、協調や共存の大切さを表しており、植物をモチーフとして自然から人間へのメッセージがここでのテーマになっています。自然を尊重し、共存する道を歩まねば人間の

未来はないのだという作家の想いが、植物でありながらも動感豊かで生の匂いが強く漂うこの魅力的な曲面に込められているのです。雪に覆われた季節から解放された植物たちの息吹きが感じられるこれからの時期、作品の周りを巡りながらあなたはこの自然からの問いかけにどのように答えますか?

## 利用案内

開館時間 午前9:00～午後5:00

※観覧券の販売は午後4:30まで

レストラン/午前10:00～午後5:00

(ラストオーダー 午後4:30)

ミュージアムショップ/午前9:00～午後5:00

休館日(毎週月曜日)

※ただし月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館。

および、9/29(土)～10/2(木)、12/28(土)～1/3(土)、3/28(土)～3/30(火)の各期間休館。

### ■観覧料金

#### ・企画展

企画展によって観覧料が異なります。

なお、企画展観覧券で、展示室1・2・3もご覧になれます。

#### ・展示室1・2・3

■一般/410円(330円)

■中等教育(後期)・高校・高等専門・大学/200円(160円)

※学生証を提示してください。

■小学・中学・中等教育(前期)/100円(80円)

※( )内は20名以上の団体料金です。

※小・中学生は土・日・祝日の観覧料が無料になります。

THE NIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

## 新潟県立近代美術館

新潟県長岡市宮前町字辰掛278-14 〒940-2083

TEL.0258-28-4111(代) FAX.0258-28-4115

http://www.lalinet.gr.jp/kinbi/index.html

e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

2003.4.1発行 4,000部

# 美術雑筆

## 「仏像の耳」

新潟県立近代美術館長 水野 敬三郎

仏像の顔の話をして2回ほど書きました。今度は顔の横にまわって耳の話です。

私が若いころ日本彫刻史の勉強を始めるにあたって、最初にテーマに取り上げたのは仏師快慶でした。鎌倉時代の初め、有名な運慶と共に活躍し、後に安阿弥様と呼ばれる独特の様式を完成させた人です。その当時（もう40年以上前になりますが）快慶の作品と認められていたものは、像が造られた時に記された銘文や自身の署名など確かな証拠があるものが約20点ほどあり、その他に後世の銘や不確実な資料から快慶作と一般に推定されている作品も幾つかありました。その推定作品が本当に快慶の作品なのか、中にはそうであるのとないのとでは快慶の理解の仕方がずいぶん変わってくるものもあります。もちろん、その推定の際には像の顔つきとか衣文の彫法などといった面での比較検討はなされていたわけですが、それでも快慶作品か否かの判定には個人の主観が入り、水かけ論に陥りがちです。誰でもが納得できる判定の方法が見つければと、それまで闇雲に撮りためてきた快慶作品の写真を夜毎に眺めているうち、ある時ふと目にとまったのが耳でした。約20点の確かな快慶作品は、快慶の若いころから晩年までの30年という長期間にわたるものを含みますが、それらの耳のひだの形、彫り方に共通した特色があることに気づいたのです。それは同じ時代の仏師運慶、また運慶の父であり快慶の師である康慶の耳とは違う形であることも確かめました（目や唇の形は単純すぎて、それから作家を区別するのは困難です）。耳の形でその他の推定作品を誰にも、自分にも

納得できるやり方で仕分けることができたという確信を得ました。その後、快慶作品の発見が相次いで、今では40点ほどに増えていますが、そのことはますます確かになっています。

仏像の耳はもちろん人間の耳をモデルにして

います。その微妙な個人差による変化を捨象して、単純明瞭な形に象形したものとと言えますが、その形式化の仕方には日本彫刻史上の各時代にそれぞれの特色があり、その特色はそれぞれの時代の表現様式と密接な関係があります。同じ時代にあっても

個人個人の作家によって形式化の仕方に差が出てきますが、ことに鎌倉時代の初め、運慶・快慶や定慶といった個性的な作家が輩出し、それまでの定朝様式とは違った新しい生き方を競って工夫していた時期にその差が目立ちます。鎌倉時代の仏像は写実的と言われる。耳にその傾向があらわれているのは確かです。しかし写実的だからと言って、この時期の仏像の耳がすべて人間の耳をその通りに写したのかというと、決してそんなことはありません。やはり、その作家特有の形式化の仕方があり、写実の度合に差があるからです。そして一人の個人作家としては、その形式化の仕方は若い時から晩年に至るまで基本的には変わらないのが普通のようなものです。耳のひだの分かれ方や傾斜の角度などが不思議に一定しています。その作家の固有のリズムがあらわれているのでしょう。

快慶作品の耳はとでもきれいにまとまった形をしているのが特徴です。神経質と言っていいくらいに形が整えられています。その特徴は実は快慶作品の全体の作風に通ずるものです。逆に言えば快慶の作風の特色が凝縮された形で耳にあらわれているとも言えます。これと比べると運慶作品の耳は実に力強い、のびやかな耳です。快慶と運慶の性格の違い、作風の違いがそのまま示されていると言ってよいでしょう。



運慶作品の耳（阿弥陀如来像 静岡 願成院蔵）



快慶作品の耳（阿弥陀如来像 奈良 西大寺蔵）